

## 高松城天守の復原検討

～発掘成果・文献史料等をもとにして～



常盤恒契  
Chikahisa Tokiwa

### II. 発掘現場の調査



調査の様子

高松市教育委員会立会いのもと、発掘現場の調査を二度行った。検出された礎石・抜き跡、四つの柱穴、土台・穴蔵入口の礎石の痕跡などを確認し、基準尺の検討や構造の検討などを行った。



調査結果

痕跡から約1尺の土台が置かれていた事が判明した。



北西の礎石

土台イメージ

### I. はじめに

香川県高松市にある高松城(現在玉藻公園、国史跡)には、かつて天守が建てられていた。明治17年(1884)に老朽化を理由に取り壊され、明治35年(1902)には初代藩主を祀るための玉藻廟が天守跡に建てられた。その後この玉藻廟は解体撤去され、現在は天守台だけが残されている。この取り壊した天守について『高松市史』では松平頼重の入国した際のものであるとし、寛文9年(1669)5月10日に棟上を行ったとあり、『英公実録』などでは寛文10年(1670)に天守完成とある。

平成18～19年に、石垣修理にともなう行われた天守の発掘調査では、天守の地下1階部分にあたる穴蔵が検出され、「田」の字型に並んだ52個の礎石と、穴蔵の入口部分にあたる6個の礎石の計58個の礎石などが検出された。

本研究は、発掘成果・古写真・文献史料等および全国の類例とあわせて、高松城天守の復原的検討を行った。



旧玉藻廟



発掘現場

### III. 古写真からの検討



ケンブリッジ大学所蔵古写真

ケンブリッジ大学所蔵の古写真によれば、天守は三重四階地下1階で、南窓造りと呼ばれるやや珍らしい形式であることがわかる。初重屋根は東西側が比翼入母屋の形式である。南北側中央には大きな出格子が設けられ、その上には軒唐破風がかけられている。二重目の規模は一重目を90度回転させた形式である。三重目は内部が上下2階に分かれ、その上階は四方に張出している。

また、初重二重目の屋根は方杖で支えられている。方杖は柱に取り付けられているため、柱位置を確認することができる。



柱位置検討

### IV. 類例について



月見櫓



長櫓

高松城には延宝4年(1676)の月見櫓と延宝5年(1677)の長櫓の二つの櫓が現存している(ともに重文)。それぞれ構造に特徴があり、月見櫓は四天柱方式、長櫓は心柱方式となっている。

天守の構造は今回の発掘成果から四天柱と心柱方式の併用であることが判明し、また、両櫓は天守と築城年代も近いので、構造等を復原する上に参考になる。

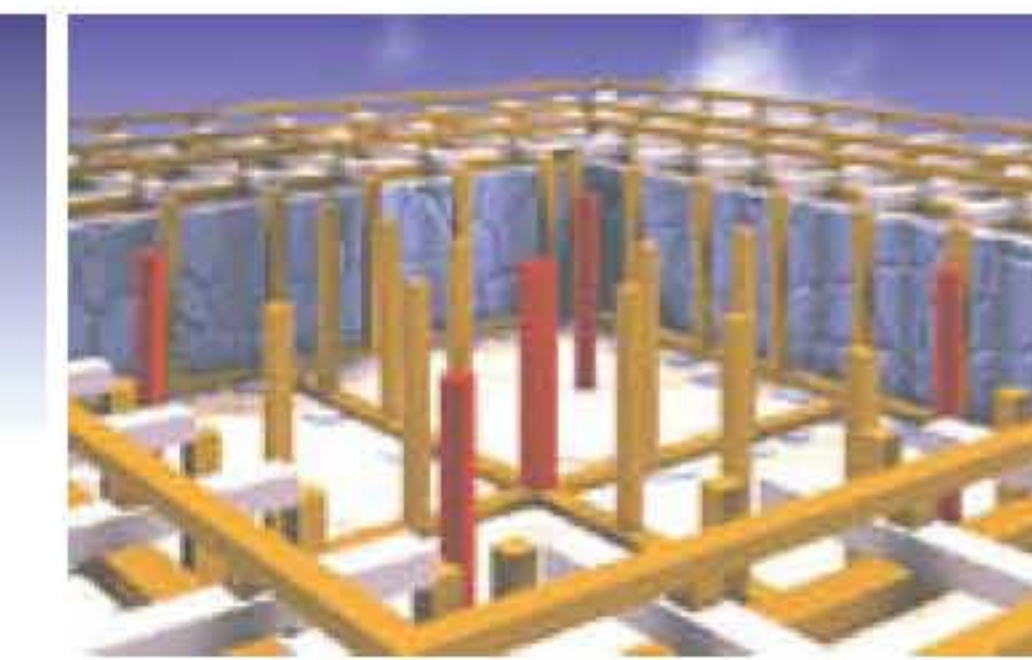
### VI. CGによる復原的検討

これまでの検討結果からCGを作成した。

このCGは天守が造られていく工程を表現したものではなく、自分が検討した結果を立体的に表現し、天守の構造を各階ごとに確認するために作成した。



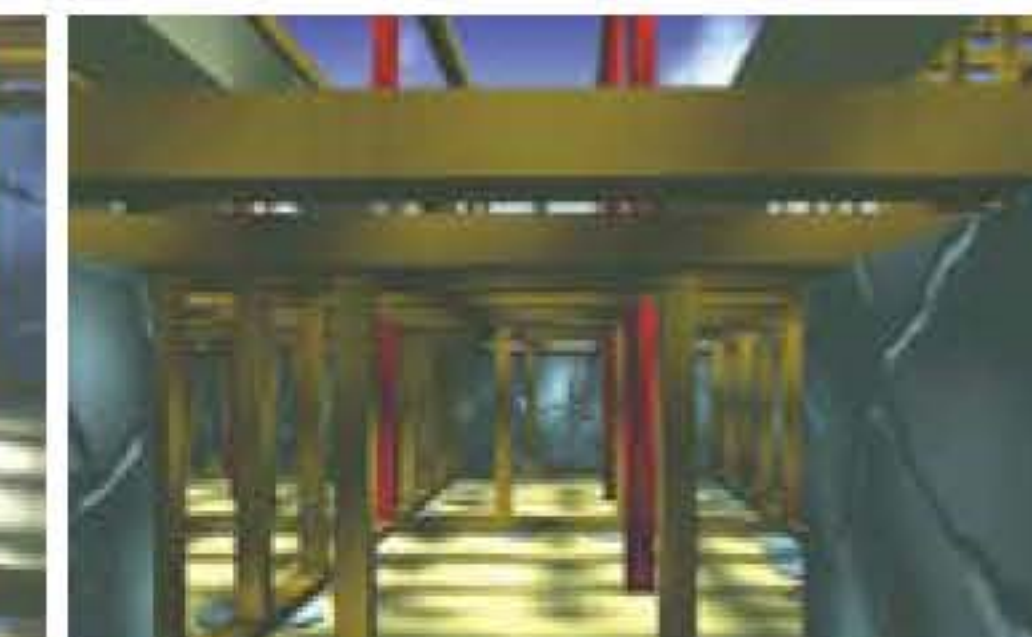
天守1～4階



穴蔵イメージ1

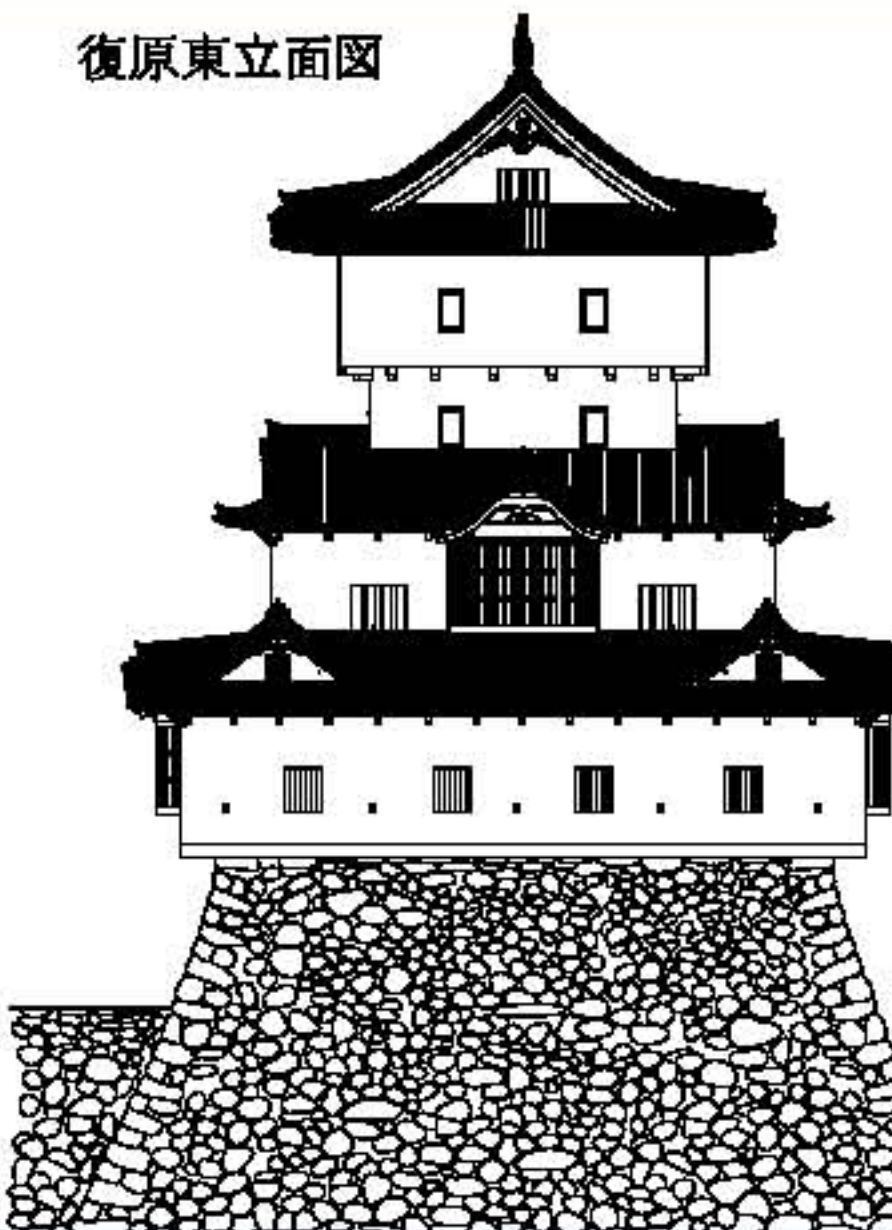


穴蔵イメージ2

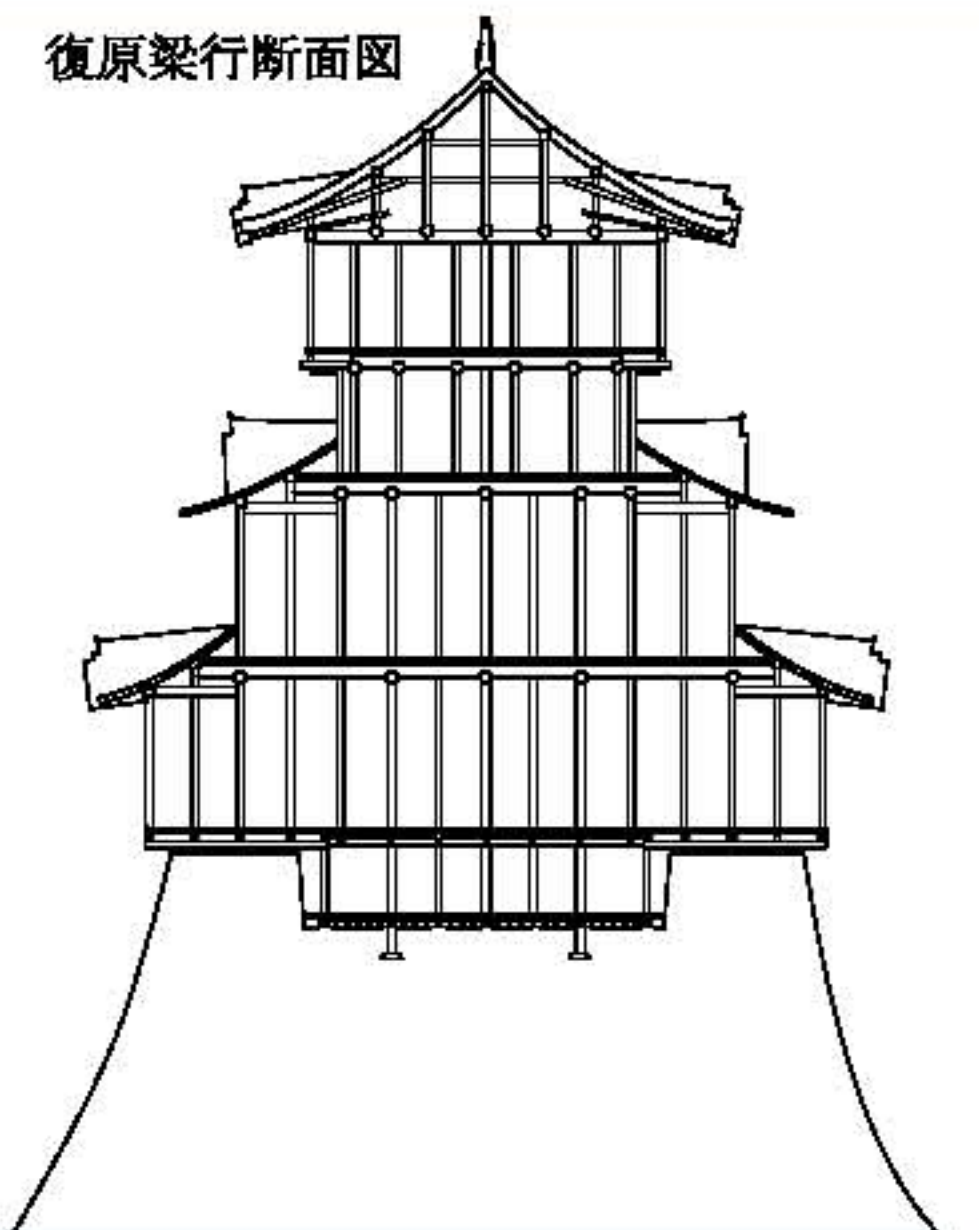


穴蔵イメージ3

### V. 復原図



復原東立面図



復原梁行断面図

### 講評

この論文は、香川県高松市に存在した高松城の天守について復原を試み、諸資料をもとにしてその実態を明らかにし、復原図を制作しCGで様相を再現したものである。

執筆者の常盤恒契氏は歴史を学ぶことがとても好きで、建築と歴史を合わせた研究をしたいとかねてから考えていたという。建築にも歴史にも関心がある人でなければできない研究成果が見事にこの論文に結実した。

復原の根拠として使われたのは、まず第一に発掘成果である。現

在天守台の解体調査が進められており、高松城教育委員会から提供された調査データと、実際に現場で調査させてもらった数多くの知見が復原の基礎資料となった。

次に文献資料がある。天守に関する文献を徹底して収集・分析し、平面(間取り)などが明らかになった。

また古写真も使っている。以前から知られていた明治期の写真のほか、近年存在が明らかになったケンブリッジ大学の古写真を使い、これを分析して外観や柱位置などを知ることができた。その

ほか類例建物として高松城月見櫓・長櫓や松江城天守・犬山城天守・熊本城天守(復原)なども使われている。いずれも現地におもむいて調査を行い、その知見を復原に生かした。

こうした多くの資料を総合させて復原図を制作し、さらに、発掘成果から判明した構造(四天柱形式と心柱形式を合わせたような骨組になっていることなど)をもとにCGで軸組みを立体的に提案している。

単なる卒業論文の域を超えたといってもよいこの論文の充実ぶり

は、最初に述べた歴史好きの人によってはじめて成し遂げられるものである。対象にのめり込むことは研究を行う上に大切なことだが、なかなかできることではない。論文としての水準の高さが認められ、見事に学部の賞を受賞したが、これこそ常盤氏の歴史好きが実った結果なのである。